

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】我妻 佑哉

【所属】(助成決定時)

大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻(基盤日本学コース)博士後期課程

【研究題目】

加耶滅亡前後における日韓関係史の考古学的再検討
ー須恵器・陶質土器をめぐるヒト・モノ・情報の多角的分析ー

【研究の目的】(400字程度)

本申請研究の目的は、これまで大阪平野南部所在の陶邑窯跡群を中心に汎列島の共通性が高いとされていた5・6世紀の須恵器生産について、大阪平野北部の大規模生産地である千里窯跡群など他産地との比較から地域性の有無を看取り、その背景に韓半島諸地域、特に南西部の加耶地域・栄山江流域とのかかわりを見出すことにある。また、上記の分析を通して、日韓の手工業製品・技術者の移動の実態を示し、当該期の政治権力がそれらをどのようにコントロールしていたかを考察することで、日本列島の国家形成に重要な役割を果たした古墳時代の対外交渉の意義を示す。

また、日韓の歴史研究で注目が集まる近現代史ではなく、原始古代における物資・情報のやりとりが双方の国家形成に大きな作用を及ぼしたことに着目することで、日韓の学際研究の契機を形成するとともに、市井の国民感情における相互理解の醸成を目指すことで、国際協調への貢献を図る。

【研究の内容・方法】(800字程度)

実施した研究作業 本申請研究においては、列島の須恵器生産と半島各地域における陶質土器生産を、①年代、②技術、③消費の側面で総合的に比較するにあたり、とりわけ国内だけでなく韓国における実物資料の実地観察を重要視した。具体的な訪韓の内容としては、(1)日本列島産の須恵器と現地の陶質土器がともに出土する事例の多い韓半島南西部(栄山江流域)所在の前方後円墳および関連遺跡の実地踏査・出土資料の観察(2023年11月・2024年7月)、(2)日本列島の須恵器生産に影響を及ぼしたとされる加耶・新羅地域の関連遺跡の実地踏査・出土資料の観察(2024年9月)を実施している。このうち(1)の2024年7月の訪韓の際には、現地の研究會に参加し、発表を行った。以下に上記作業に基づく研究の内容を①～③の項目ごとにまとめる。

①日韓須恵器・陶質土器編年の再検証と並行関係の精査 古墳時代第2の規模の須恵器生産地であり、新出土資料の増加の著しい千里窯の製品を対象に、その時期ごとの形態的変化の順序(=千里編年)の検討を行い、既往の陶邑窯における須恵器編年(=陶邑編年)との比較を試みた。また、その成果を通して主に韓半島南西部の大加耶・小加耶～栄山江流域出土日本列島産須恵器の年代比定を行うことで、日韓における須恵器編年ー陶質土器編年間の並行関係の精査と連動関係の有無の検証を図った。

②各地主要窯の技術系統の解明 上述の陶邑窯・千里窯に加えて、近畿地方周辺の各地域における主要須恵器生産地の製品を相互に比較し、共通性と差異を析出した。とりわけその差異の背景について、韓半島各地からの影響が及んでいた可能性を視野に入れ、実物資料に基づく比較を行った。

③製品供給や消費地における使用実態 上記①・②の成果をもとに、日本列島内の有力古墳や韓半島の一部の有力古墳から出土した須恵器がどの産地あるいは技術系統の製品であるかを検討した。分析にあたっては、特に政治性を強く反映すると考えられる要素(古墳の墳丘形状や副葬品)との共存関係に着目して当該期の器物・情報流通構造の特徴をつかみ、手工業生産と政治権力との関係を展望した。

【結論・考察】(400字程度)

古墳時代研究に広く活用されている既往の陶器編年と本研究を通して提示した千里編年とを対照すると、①千里窯では須恵器各器種がやや古い特徴を残しながら形態を変化させていくことが判明し、その差異が生じた契機は千里窯における大規模生産の開始期≒実年代でいう6世紀前半にあると推察した。そのため当該期の変容を重視して日本列島の須恵器と韓半島の陶質土器とを比較したところ、①6世紀前半代の須恵器器台(壺を載せる儀礼用器種)と栄山江流域・大加耶における一部の陶質土器器台の大型化が日韓で併行・連動する可能性、②6世紀前半の千里窯で見られる一部の器種の製作技法(斜行整形・火襠・端部折り返しなど)が栄山江流域に由来する可能性、③6世紀前半の千里窯やその影響関係下にある窯場で製作された須恵器が当該期の列島の大王陵をはじめ各地の有力古墳や一部は韓半島にまで供給されている可能性、を見出した。当該期は日本列島において王陵が大阪平野南部から同北部へと移動する時期であるとともに、韓半島に前方後円墳が築かれ、滅亡以前の加耶諸国で有力王墓が築かれる最後の盛期でもあることから、これらの状況が日韓関係に及ぼした影響が土器の生産・供給に顕れているとの見通しを得た(516字)。